オブジェクション１７５

岡森　利幸

非難の嵐の中で

本編は、次の11項目からなる。事件・事故の発生順での配列を原則としているが、例外もある。

① 世界の３大ファシスト：昭和天皇
② 「死ね」と言われ、自殺した少女たち
③ 秀岳館高校伝統の熱血指導
④ 知床観光船カズワン沈没
⑤ 口座の４６３０万円はオレのもの
⑥ カジノは共食い
⑦ 小松基地Ｆ１５墜落
⑧ 敵基地攻撃能力を言い換える
⑨ 政府系金融機関の議員案件
⑩ ロシア軍の極悪非道ぶり
⑪ 安倍晋三元首相暗殺

・文中敬称略。
・文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが含まれる。
・以下の【　】内は、新聞記事・週刊誌の引用あるいは要約・意訳したもの。

① 世界の３大ファシスト：昭和天皇

【毎日新聞朝刊 2022/4/26 社会
ウクライナ政府は、ヒトラー、ムソリーニ、昭和天皇の顔写真を並べて「ファシズムとナチズムは１９４５年に敗北した」とツイッターに投稿した。日本政府がそれに抗議した。】

ウクライナ政府が、プーチンの主張（ウクライナではネオナチが台頭している）に反駁（はんばく）するかのように、それをプロパガンダ的な意味で（「テメーこそがファシストだろう」と当てつけている）投稿したところ、日本政府が強く抗議した。「その３人を同一視するな！　昭和天皇は違う」ということだろう。

それでウクライナ政府はしぶしぶ（？）、昭和天皇（裕仁（ひろひと））の顔写真だけは取り下げた。ロシアの軍事力

には屈しないウクライナ政府が、日本政府の圧力には簡単に屈してしまったのは、政治的な配慮があったからかもしれない。外交的に穏便な対応をしたわけだ。

ヒトラー、ムソリーニと同列に昭和天皇ヒロシトが並べられるのは、一般の日本人には奇異なことかもしれない。しかしながら、当時の西欧での政治風刺漫画では、それがありふれた構図だった。

日本は１９４５年まで帝国主義の国だった。ファシズムで鳴らした国だった。八紘一宇（はっこういちう）の掛け声のもと、アジアにおいて軍事作戦を展開し、多くの国に侵攻した。中国で泥沼の戦いをしているときに（日中戦争）、英米豪にも戦争を吹っ掛けた（太平洋戦争）。１９４０年にはドイツ、イタリアと三国同盟を結び、ともに第二次世界大戦に突き進んだ。その日本の顔が昭和天皇であり、絶対的な統帥権を持ち、軍部の頂点に立っていた人だ。つまり、軍部（皇軍）を統率する最高責任者だった。たとえ、名ばかりであったにしても。

だから、他国から見れば、日本のトップ・昭和天皇を、ヒトラーやムソリーニと同列にするのは当然であり、現に当時の欧米では、そうみなされていた事実がある。「ヒトラー、ムソリーニ、ヒロヒト」と三人を並べるのは、今でも「世界的な歴史認識」と言わなければならない。

昭和天皇の代わりに東条英機を挙げる向きがあるかもしれないが、東条英機などは昭和天皇のお気に入りの部下のようなものだから、格が違いすぎる。彼では、ヒトラーやムソリーニと並び立てない。

皇国史観を今でも引きずっているような日本政府がその扱いに抗議するのは、やはりどこかの国が指摘するように、歴史認識がずれていると言わなければならない。日本政府は、昭和天皇が戦争犯罪に問われなかったことを理由にしたいかもしれないが、それは、連合国側が戦後処理政策を推し進めるうえで、特別な政治的配慮をした結果だろう。かれらは昭和天皇の戦争責任をうやむやにした。「宣戦の詔書」に判を押したことに、昭和天皇は何らかの責任をとらなければいけなかったことだろう。その責任の一端を果たしたのが、玉音放送だったかもしれないが…。

昭和天皇が、国家的にファシズムに傾倒した大日本帝国を代表するファシストだった」とみなされることに、今の日本政府が文句を言う筋合いではない。現憲法下では、天皇は「象徴」だろうが、昭和２０年までは、大日本帝国の象徴だった。昭和天皇自身がファシストだったかはともかくとして、日本がファイズムの

国だったことは確かだ。神のごとく、あがめられた天皇がそれを「象徴」していたし、何といっても最高権力者だった。軍部を掌握する立場にいたから、日本軍が起こした数々の侵略・謀略、事変や戦争が、天皇と無関係だったとするのは、おこがましすぎる。

昭和になると、国中が軍国主義一色に染められた。進軍して勝利すれば、多くの国民が高揚した。それに反する主義・主張をしたり軍に協力しなかったりすれば、その多くが治安維持法などで弾圧・抑圧された。特高警察に付け狙われた。司馬遼太郎が嘆いたように、ファシズムの国になっていた。「ああ、日本はどうしてこんな国になってしまったのか」

ファシズムの意味を見直すと、[広辞苑第六版より引用]

1．イタリアのファシスト党の運動、並びに同党が権力を握っていた時期の政治的理念およびその体制。

2．広義には、1と共通の本質をもつ傾向・運動・支配体制。第一次大戦後、ヨーロッパに始まり世界各地で出現（イタリア・ドイツ・日本・スペイン・南米諸国・東欧諸国など）。全体主義的あるいは権威主義的で、議会政治の否認、一党独裁、市民的・政治的自由の極度の抑圧、対外的には侵略政策をとることを特色とし、合理的な思想体系を持たず、もっぱら感情に訴えて国粋的思想を宣伝する。

②「死ね」と言われ、自殺した少女たち

【毎日新聞朝刊 2022/4/28 社会

大阪市立小学校４年の女子児童（当時 11 歳）が２０１９年９月に、いじめを受けたと示唆するメモを残して自殺した問題で、第三者委員会が調査報告書を提出した。児童が同級生らからいじめを受けていたことを認定し、それが自殺の要因の一つになったと結論づけた。「いじめ行為は確認できなかった」とする市教委や学校側の判断を覆した。

第三者委がいじめと認定した行為は８件。▽複数の友人に貸した金銭を返してもらえない▽同級生から「死ね」と言われた――ことなどだった。学校側の対応についても、注意を払えていなかった、いじめに対する認識が不十分だったと批判した。】

【毎日新聞夕刊 2022/6/2 社会

山形、中１いじめ、両親が娘の自殺の真相を知りたい。

「同級生からＬＩＮＥで悪口を言われる」

警察官「学校の下駄箱に『死ね、キモイ』と書かれた

紙を入れられていたそうですね」
学校・教委に不信感が募る。】

女子児童の自殺がいじめによるものだったか、どうかが問われた事件だった。学校側がかたくなにいじめを否定したが、大阪の例では、第三者委員会が調査し、3年近くたって、ようやくいじめの事実（8件）を認定したわけだ。

少年少女の場合、仲間から攻撃され、仲間外れにされることが、一番つらいことだろう。彼らは、ちょっとしたきっかけで、仲間の一人を嫌いになり、激高して罵倒したり、悪口を言いまくったり、いやがらせ行為に走ったりするものだろう。自分では感情を抑えられず、思いがけず攻撃的になったりする。嫌いな相手を無視する戦術（しかとする）もなかなか有効だ。

嫌われる側にしても、自分が仲間たちからなぜ嫌われるのか、理解できない場合もある。「きもい！」と言われても、自分では、どうしようもない。何がきもいのか、全然わからない。自分の個性が否定されることだろう。

複数のクラスメートたちから「死ね！」と言われて、少女は死んでしまった。そんな命令に従う必要はないにしても、「死ね」という言葉の中には、限りなく強い憎悪が込められている。

単に「死ね」が禁句だったから、暴言だったから、ということより、仲間外れにされた悲しみのインパクトが大きかったことだろう。［仲間たちが自分を嫌い、のけものにする。一番親しかった友も、私をなじる］――――自分に非があったにしても、仲間といっしょにいたい少女としては、孤立することに耐えられないのだ。孤立は深い悲しみや恐怖に陥らせる。そんな状況に追いつめられれば、絶望感を抱き、〈もう自分は生きていけない〉と考えるのは、その状況だけで十分にありうることだろう。少女の場合、特にその傾向が強い、と私はみる。

孤独に対して、この少女は特に弱かったのかもしれない。私が推測するに、この少女は一人っ子で、隣近所に遊べる子がいなかったのだろう。クラスで孤立しては、もう逃げ場がなかった。

なぜクラスメートたちは少女に「死ね！」といったのか、明らかではないが、少女が何か悪いことをしたのかもしれない。それで嫌われたのかもしれない。金銭の貸し借りのトラブルがあったのだろう。返すつもりがなく借りたのなら、詐欺行為であり、立派な犯罪

行為だ。
　大阪では第三者委が［複数の友人に貸した金銭を返してもらえない］という事実をいじめと判定したことを、私は評価したい。学校や市教委なども、金銭の貸し借りがあったことを知っていたのだろうが、それをいじめとは判断しなかったことになる。これまでにも私が主張してきたことだが、未成年における金銭の貸し借りはいじめの始まり、と考えなければならない。そもそも、金銭の貸し借りは友だちを失くす。

③　秀岳館高校伝統の熱血指導

【YAHOO!ニュース 2022/4/23 FRIDAY Digital
秀岳館高校、コーチ暴力疑惑動画で「生徒が謝罪する」本末転倒。
熊本県、秀岳館高校サッカー部。４月２１日にＳＮＳで拡散された「コーチが生徒に蹴りを入れる」動画が大きな波紋を呼んだ。
高校生の保護者「生徒が撮ったその動画を見て、驚きました。無抵抗の子の尻に、大人が蹴りを入れている。背中を殴る『ぼこっ』という音まで聞こえました。運動部に属する子をもつ親として、胸が締め付けられる思いです」
さらに翌２２日には、驚天動地の事態が起こった。この件で３年生の部員たちが「謝罪動画」を公開したのだ。動画は２分２０秒。主将の生徒がまず話し、続けて、暴行を受けた当事者の生徒が状況を説明、動画を撮ってＳＮＳにあげた２人の生徒が話し、最後に画面の１１人が深々と頭を下げ、「今回の騒動」について「謝罪」をした。
都立高校教員「一見して、痛ましいとしか言いようがありません。生徒たちは顔を出し、名前を名乗ってこの動画に出演しています。なぜ、こんなことをしなければならないのか。理由がどうあれ、暴力による『指導』は、あり得ません。ふつうの学校では許されない行為なのに、その被害を受けた生徒が謝罪するとは…」
これは、生徒たちの自主的な行為なのか。だれかに強要されたのではないか、という声もあるが、
高校サッカー関係者「彼らにとっては、自分たちのキャリアがかかっていますから。高校サッカーの選手たちの『進学』は、コーチら指導者の気持ちひとつ。このことで、大学進学の道が絶たれたら困るのは生徒です。思いがけず大ごとになって慌てているのかもしれません」

秀岳館はスポーツの「名門」校。サッカー部には、男女あわせて２００人を超える部員がいるという。
同前「秀岳館高校はかつて野球部でも、２０１６年のセンバツで、選手による『サイン盗み疑惑』が起きている。今回の暴力事件を知って、ああ、秀岳館か、と思いました。プロ野球選手、サッカー選手を輩出している強豪校ですから、全国から生徒が集まってくる。学校というより、養成機関のようなものと思ってます」
スポーツで進学をしたい、将来の職業に結びつけたいという思いがあるから、そんな「指導」に不平不満をもってはいけない…生徒たちがそう思って「自主的に」謝罪動画を作り、公開したのかもしれない。
けれども、この子たちに「そんなこと」をさせてよかったのだろうか。冒頭のある保護者はこういう。
「動画をみて、涙が出ました。今、運動部活動に夢中になっている息子がいますが、こんな世界に置きたくない、と心から思いました」
暴力による大きな戦争が世界を揺るがせている。戦争を仕掛けた側には「彼らなりの暴力の理由」がある。人生を選ぶのは本人の意思だ。世界に向けて、動画で「謝罪」した秀岳館の生徒たち、また同じような環境にある子どもたちが、よりよい人生の選択ができるよう願ってやまない。】
【毎日新聞朝刊 2022/5/6 社会
熊本県八代市の秀岳館高校のサッカー部男性コーチが部員の生徒たちに暴行した問題で、学校側は、このコーチによる部員への暴力行為を２４件確認したと明らかにした。５人が打撲などのけがをした。他のコーチの暴行も１件あったという。４月２０日に学校が事態を把握した。熊本県警は４月２５日、暴行容疑でコーチを書類送検した。問題発覚後に、部員１１人がその動画投稿したことを謝る映像もＳＮＳに投稿された。学校側は、段原一志監督がその映像の撮影にあたり、マスクを外して名乗るよう指示していたことも明かした。中川誠也校長は会見でそれらについて謝罪した。】
【YAHOO!ニュース 2022/5/12 熊本日日新聞
熊本県八代市の秀岳館高男子サッカー部の練習に入学前から参加していた中学３年（当時）の男子生徒が上級生に暴行され、入学辞退に追い込まれた問題で、秀岳館高が生徒の入学をいったん認める方針を固めたことが１２日、分かった。入学した後、他校への転学手続きを進める。生徒は入学が認められていなかったため、転校できない状態が１カ月以上も続いていた。
県内の私学を所管する県私学振興課や生徒の保護者に

よると、同課が秀岳館高と協議。１１日、同課から保護者に「秀岳館高が入学を認める形で転校できるようにする」と連絡があった。今後は転校先を決めて手続きに入る。この生徒は県外出身で、スポーツ推薦で秀岳館高に入学予定だった。しかし、入学前の３月、サッカー部の寮に入って数日後、食堂で配膳中に２年生（現３年生）の１人から「調子に乗るな」と言われ、後頭部と背中を殴られた。

保護者が八代署に被害届を提出して４月に受理された。しかし、生徒は一連の騒動で入学式前の４月４日に入学辞退届を提出せざるを得ない状況に追い込まれた。

蒲島郁夫知事は１０日、この事態に対し、「看過できない。生徒のため、あらゆる可能性を追求したい」として生徒の進学を支援する考えを示した。県私学振興課は「生徒の将来を考え、今後も全力を尽くしたい」と言っている。

保護者によると、自宅で過ごしていた生徒は、この知らせに「本当なの？」と驚いた表情で何度も聞き直して喜び、転校に向けて勉強を始めたという。（植木泰士）】

【毎日新聞朝刊 2022/5/19 社会

秀岳館高のコーチを懲戒免職処分に、同監督の退職届を受理した。】

１．事件

サッカー部のコーチが部員たちに対し、殴る蹴るの暴行をする様子の動画がＳＮＳに投稿された。これがきっかけに、そのコーチだけでなく、サッカー部監督だった段原一詞（かずし）氏（事件発覚後、退任）の行き過ぎた指導ぶりが取り沙汰されている。監督コーチ陣の中で、実名が挙がっているのは彼だけだ。（悪質性が高いから）

１０年ほど前に卒業したＯＢの間からも体罰的な行為の数々が証言された。以下、熊本放送の取材より―

段原監督の指導ぶりについて、「正座３時間です。びくりでもすると、もう前蹴りです。前蹴りされて、『もう正座の時間は終わりました、立て』って言われて立った時にフラフラしているヤツは殴られます。『ビシッとせんか』と言われて、僕それはありますね」

「殴る際は、平手ではなくこぶしで、力も相当強かったと言います」

「顔を殴られていると、連発で来るんです。バンバンバンで、グーで。よけたら『よけるな』って言われて、またあの人（段原監督）の気が済むまでです」

などと、OBたちは、動画のシーンよりもずっと生々しい行為を語っていた。
しかし段原自身は、会見の席で暴行を認めようとはしなかった。彼にとっては、すべて指導の範囲内と考えているのだろう。眼光を鋭く光らせながら、謝罪しながらも、コーチらの暴力行為を否定した。
「ボクは見たことありませんでした。知りませんでした」　これは見ぬふり知らぬふりだろう。
彼は「暴行したことはない」と言ったが、それは本心だったかもしれない。心の中では。〈暴行ではなく指導の一環だった〉
〈オレは規律を正したんだ。たるんだ部員の性根をたたき直してやったんだ。部員になめられるような、やわなコーチ陣ではいかんのだ。指導者の威厳を示さなくてはいけない。でも、自分のためじゃない、秀岳館のためにしたことだよ。現に、オレの指導で秀岳館高サッカー部はずっと強くなったじゃないか〉とでも言いたかったはずだ。
また、新入部員が入学前の合宿で、先輩から暴行をうけ、入学を取りやめたことで、転向もできなくなった（そのままでは浪人になってしまう）問題も明らかになった。
この学校のサッカー部は、複数のコーチと監督がいる指導体制であり、一人のコーチが暴力行為をしたならば、他のコーチたちがそれを見ているはずだが、長年、見て見ぬふりをしていたことになる。長年、トップの監督が率先してそんな熱血指導をしていた状況が浮かび上がる。一人の下っ端コーチの書類送検だけでは済まないのだ。
謝罪とは屈辱的な行為だ。監督が、コーチの暴行を撮影して投稿したことに関連した11人の生徒たちにマスクを外させ、顔出しして謝罪する動画を撮影して投稿するという報復的行為を生徒たちに指導した。
生徒たちはそもそも暴行の被害者だ。謝るべきはコーチのほうだろう。監督が本末転倒の指導を行ったことに、世間から強い批判が出ている。
生徒たちはどんな悪いことをしたというのか。監督としては、生徒たちが暴行されるのは、それなりの「正当な理由」があったからで、それを示さなかったことが誤解を招く行為だったと言いたいのだろう。
動画投稿によってコーチの面目がつぶされ、生徒たちに裏切られた思いを抱き、監督の段原が激怒した。そして撮影に関係した生徒たちをあぶりだし（犯人探し）、その生徒たちに屈辱的な、恥さらしの舞台に立

たせた。
１１人の生徒たちにその理由を説明させている。
「感情的になってコーチをバカにするような発言をしたのが今回の原因です」
部員が具体的などんな発言をしたのか不明だが、バカにされたコーチが怒ったから、暴行に至ったのだという説明だ。それで暴行を正当化したつもりなんだろう。しかしながら、コーチが部員たちにバカにされるようではなさけない。バカにされたことが動機かもしれないが、暴行の「正当な理由」ではありえない。暴行する権限など認められない。相手が攻撃してきたケース以外、正当な理由とはならない。

２．熱血指導

グランドを何周も走らせることや、何時間も正座させるなど、しごきのようなことも行き過ぎた指導とみなされるだろう。監督やコーチが、この権力を振り回し、そうして来たらしいが、部員たちに「不当な強要」をすることも、もはや許されない。それが世間に知られたら、今回のような騒ぎになるのだ。
確かに、部員をしごきまくって熱血指導すれば、それなりに強いチームになることだろう。学校側にしても、自絞のサッカーチームが名の知れた強豪チームになればいい（学校の名誉になることだし、それで入学希望者も増える）と考え、それまでに何件か暴力行為の事実を見聞きしていたはずだが、多少の熱血指導は目をつぶっていたのだろう。学校側は監督の指導方法に異を唱えることはなかったのだろうし、保護者からのクレームに対し、むしろかばっていたかもしれない。コーチたちは監督の指導方法に従っていたのだし、上級生らはこの指導方法を見習って下級生に先輩風を吹かせ、下級生や新入生の態度が気に入らないときには「調子に乗るな！」などと怒鳴りつけ、手も足も出していた実態がある。それが秀岳館高校の体育会系サッカー部の伝統だろう。

３．伝統と習慣

秀岳館高校は、熊本県八代（やつしろ）市の名門高校だ。２００１年４月にこの校名を変えたが、まだ一般に、それ以前の「八代商業」という校名になじみがあるだろう。さかのぼれば、１９２３年（大正１２）創立の学校にたどり着く。今年で９９年の長い歴史がある。専門的な分野の教育だけだったものから、地域の実情に合わせ、時代の要請に応えて発展してきた高校だろう。
高校のスポーツ大会では、サッカーだけでなく野球の強豪校として、常に上位の成績を残しており、卒業

後プロで活躍する選手を多く輩出してきた。体育会系らしい指導方法を伝統的に行ってきたわけだろう。

上位者は、下位者のささいな落ち度に対し、あるいは単に気に入らないという理由で、攻撃をしかける。それが上位者の特権、義務のようにふるまう。下位者の弱みに付け込みながら……。この場合、生徒が退部したりすると、大学への進学が難しくなる（内申書を悪く書かれる）のだ。暴行にひたすら耐えなければならない。しかし、そんな指導方法に疑問を持つ者が出てくるのだろう。部員の一人（数人か）が実態をＳＮＳに投稿したのが、事件発覚のきっかけになった。

耐えているだけの部員にとって、失うものが大きい。他人の目を気にし、怒鳴られることに常にびくびくするような「指示待ち人間」にしか育たない。あるいは自信過剰で、弱いものをいじめて楽しむような大人に育つことだろう。上級生の段階で、それが芽を出している。そして彼らが家庭を持ったとき、家庭内暴力（ＤＶ）に走ったりするだろう。なにせ、学校で教わったことなのだから。

④　知床観光船カズワン沈没

【毎日新聞朝刊 2022/4/24 一面
知床遊覧船、２３日午後１時１５分ごろ、カズワンの乗員から「船首部分が浸水し、沈みかけている」と１１８番通報があった。カズワンは２０２１年６月１１日、ウトロ漁港近くの浅瀬に座礁する事故を起こした。水温、４月後半は１～４度。】
【毎日新聞朝刊 2022/4/25 一面、社会、特別面
知床観光船事故、死亡１０人、不明１６人。
４月２３日午後１時１３分ごろ、カシュニの滝付近で、カズワンの船首に浸水が発生したとの連絡があった。このとき風と波が荒かった。】
【毎日新聞朝刊 2022/4/28 社会
知床観光船事故、２７日記者会見、事故から５日たって初めて公の場に姿を現した責任者（桂田精一社長）は、３度にわたり床に膝をついて謝罪した。「８時に（船長と）打ち合わせをして、私が（出向を）決めた。その時波も風も問題なかった。出席者「原稿を読んでおり、自分の考えで話していなかった」】
【毎日新聞朝刊 2022/4/30 総合
知床事故一週間。社長の、規定への認識が甘い。
ある観光船の船長が出港準備中のカズワンの豊田徳嘉船長（54）に「危ないから絶対に出るなよ」と声をか

けた、それでもカズワンは出港した。桂田社長「海が荒れるようであれば引き返す『条件付き運航』での出航を決めた」】

【毎日新聞朝刊 2022/5/1 一面

知床観光船事故、４月２０日に船舶検査を受けた際、船長から通信手段として衛星電話から携帯電話に変更したいとの申し出があった。豊田船長が「海上でもつながる」と説明したことから変更を認めた。ただし、携帯電話は通信事業者によって通信可能なエリアが異なる。携帯電話（ａｕ）はこの大半で通信できないという。船舶安全法では２０トン未満の小型船について携帯電話を連絡手段にすることは認められている。】

【毎日新聞朝刊 2022/5/7 社会

知床観光船事故、定点連絡を怠る規則違反か。無線記録に空欄が目立つ。同社の運行管理者である桂田精一社長も事務所を離れていたとみられる。】

【毎日新聞朝刊 2022/5/11 社会

知床事故、出港可能と判断した理由を記録していないという複数の安全管理違反があった。知床観光会社が昨年３月、運行管理者を桂田精一社長に交代すると北海道運輸局に届けた際、３年の運行管理の実務経験があると判断した。（しかし彼にはなかった）】

【毎日新聞朝刊 2022/5/19 社会

知床事故を受け海保の救助体制を見直しへ。ヘリや救難を増強、北海道の東北部は１時間で到達できないエアレスキューの空白地帯と称されていた。】

【週刊文春 2022/6/2 （６月９日号） ワイドインモラル

社内資料入手、隠していた船首のヒビ

「事故を起こしたカズワンは大きな爆弾を抱えていた。それを放置したまま今シーズンに突入してしまった。そのことを社長も認識していたはず」こう語るのは、知床遊覧船の元従業員Ａさんだ。

「もともと船体はボロボロだったが、２０２１年の５月の事故で、船首の部分に亀裂のようなヒビが入った。しかし当時の船長（今回の事故の船長と同一）がパテで応急処置をして、上から塗装を施したようで、ヒビは隠れて見えなくなった」「さらに船長は『パソコンに保存してあった船首の傷の写真データも（社長に）消されてしまった』と嘆いていた」】

【ＮＨＫニュース 2022/6/2 6:50

知床 観光船沈没 国交省 船倉仕切る壁の穴 検査で確認せず

北海道の知床半島沖で観光船が沈没した事故で、船の前方の甲板の下にある２つの倉庫を仕切る壁に穴が作

られ、大きな空間ができていたことが関係者への取材で分かった。船底の前方に水がたまりやすい構造になっていて、海上保安庁は船首側から浸水したとみられる今回の事故との関係を詳しく調べることにしている。知床半島の沖合で観光船「ＫＡＺＵ１」が沈没し１４人が死亡、１２人の行方が分からなくなっている事故では、海底から引き揚げられた船の現場検証などが進められていて船体が１日、陸揚げされた。
衝撃などでできた穴ではなく人為的に作られたものとみられ、この穴により船底全体のうち前方の４割近くが一つの大きな空間になっていて船底の前方はより多くの水がたまりやすい構造になっていたということだ。これまでの調べで前方の甲板から下の船倉につながるハッチカバーが外れていたことが分かっているほか、観光船の通報内容では船首側から浸水したとみられていて、海上保安庁は今回の事故との関係を詳しく調べることにしている。
また国土交通省などによると、去年、国が行った船舶検査では船底の中央から後方にかけてのエンジンがある機関室の壁と、かじの近くの「だ機室」と呼ばれる部屋の壁の２か所に穴ができていることを確認し、検査員の指摘を受けて運航会社側は穴をふさいだという。一方、今回の事故の３日前に行われた検査では前方の２つの船倉を仕切る壁に穴があることを指摘した事実は確認できていないということで、国は検査員が認識していたかなど事故直前の検査について検証することにしている。【毎日新聞朝刊 2022/6/6 社会
知床観光船、避難港「文吉湾（ぶんきち）」に入れば（助かったかもしれない）。（文吉湾は、知床岬から西南約２キロにある、原則的に漁船用の港）】

１．脆弱な船

船の構造上、浸水で沈没に至ったのは、あまりにも脆弱だ。旅客を乗せる船舶として、弱すぎる。
この船、カズワン（ＫＡＺＵ１）は１９トンだ。２０トン以下を小型船舶とする規定をクリアするぎりぎりの大きさだ。業者としては、もっと大きい船で多くの乗客を乗せて運航したいところだろうが、それでは規制が厳しくなる。つまり、規制逃れのような船体だ。小さな船だから、安全管理上、ゆるく規制される。
船体が小さいだけでなく、建造から４０年たった、かなりの老朽船だった。以前は瀬戸内海で運行されていたものだ。それを荒波のオホーツク海で運用しよう

とすることに、無理があったと思える。
　今回の遭難のポイントとして、船側から「船首から浸水し始めた」ことが、最初に報告されている。何かにぶつかったという報告はされていない。その浸水によってエンジンが止まったことも、事態を悪くした。浸水によって、エンジンが海水をかぶったために止まったと考えられる。乗客を乗せる船は、自説を言えば、安全性のために、エンジン一つが故障して止まっても、もう一つのエンジンで自力航行できるように、エンジンを二つ持ちたいところなのだ。
　カズワンには去年の座礁事故で船首に亀裂が入ったという過去がある。その時は港に近いところでの座礁だったから、何とか戻れた。それは修復したというが、その傷が目に見える形で残っていたという地元民の証言があり、十分な修復が行われたかが疑わしい。修復が不十分で、船体の強度が低下していたのだろう。
　今回、北西からの風と3メートルもの荒波が船首をたたきつけたことで、その部分が割れた（傷が広がった）可能性が高いと私は当初推測した。航行管理者としては、そんな船体の修理をあきらめて廃棄する選択肢があったはずだ。
　しかし、一カ所から水が入ってきて沈没したと考えるのは疑問が生じる。船底は一般に隔壁構造になっているから、全体に水が行き渡って沈没するようなことにはならないはずだ。カズワンではまれなケースが起きたことになる。

2．桂田精一氏の弁明

　運行会社社長桂田精一氏（58）が自分の保身のために必死になっている姿が特異なことだ。
　桂田氏は、カズワンが航行中、事務所に待機していなかったなど運行管理者としての責任を果たしていなかった。事務所の通信設備の不備があったのに、アンテナが折れていることが一目でわかることなのに、放置していた、船にも無線通信やＧＰＳの機能がまともに供えなかった。観光船の運航の安全意識に欠けていたし、基準の遵守を徹していなかった。
　彼のコスト意識は強い。コストを削減できることなら、何でもするという徹底ぶりが見て取れる。前掲の記事の中に、いくつも散見されることだし、法的に規制されていることを知ってか知らずか、それに反したことまでしている。公的な検査員に指摘されて仕方なく従うという方針に徹している。
　経営者としては、それが合理的だろうが、彼の場合、やりすぎている。海のことをろくに知らないのに、素

人的な発想で思いつくまま、強引に押し通している。観光船業を熟知しているような他人のアドバイスや意見など、取り入れもしなかったのだろう。それが事故の遠因になっている。

以下は4月27日、記者会見記者会見での様子。

・土下座

土下座したこと。謝罪の態度を形にした。両膝を折って床に膝まずき、額を床につける究極の謝り方だ。何度も練習したかのように、正統的な土座だ。初めてだと、こうはうまくできない。頭を下げれば、怒りが頭の上を通り過ぎ、すべて許してもらえるとでも思ったようだ。しかし、それは自分の罪を認めたことになる。その後の説明では自分の保身に徹する言葉ばかりだった。

・ウソ泣き

桂田氏は声を震わせ、泣いた。一時(いっとき)泣いていたが、その後、何事もなかったように答弁したから、〈泣きまねをした〉と指摘されている。

・責任転嫁

この日の出港を判断したことが事故の大きなキーポイントになる。朝のうちに出港を取り止めれば、あるいは途中で引き返せば、この事故は起きなかった。その判断は、社長が握っていたと推測される。

彼は責任を行方不明になっている豊田船長になすりつれようとした。彼は「出港は朝の8時に船長と相談して決めた」などと言っていたが、運航会社の社長と、雇われ船長とでは、立場が違うから、相談ではなく、一方的な命令レベルの話だろう。業務命令だった。雇われ船長では、社長の言い分に口をはさむ権利も拒否することもできない。

・笑い

乗客の親族に対しての説明会では、問い詰められて、へらへらする場面が時々あったという。鼻で笑っていると表現する人もいた。顔に笑みを浮かべた程度だろうが、それを見て親族たちが怒りまくった。

「笑ったな？　笑っただろう（**コノヤロー**）」カッコ内は心の叫び

この場で笑うとは、親族らとしては許せないことだろう。親族らをバカにした笑いだったのだろうか。

桂田氏は、問い詰められ、窮地(きゅうち)に陥ったから、もう笑うしかなかったのだろう。苦笑(にがわら)いというものだ。

〈これは、自分にとって現実とは思えない。ありえない、おかしな場に立たされている〉

笑ってごまかそうとする態度が自然に出てしまった。

笑いを抑えることができなかったと見える。問い詰められてオタオタしている、みじめすぎる自分に対して、笑ったものだろう。

3．遭難原因

当局から正式な事故報告書が出される前に原因を語るのはおこがましいけれど、読者のご参考とされたい。

［午後から風雨が強まるという天気予報・注意報を無視して出港した］

知床半島の周辺は、オホーツク海の外洋の波風が立つ。つまり時化（しけ）ることがある。そんな時は漁船も出漁しない。危険性が十分にあったのに、観光客の乗船料金を目当てに単独で3時間というコースに出航した。

［前方の甲板から下の船倉につながるハッチカバーが外れていた］

前方の甲板にあるハッチカバーが外れていたことは、大波をかぶれば、もろに海水が中に入ってくる。これが浸水の主因だった可能性が高い、と私はみる。

［船の前方の甲板の下にある2つの倉庫を仕切る壁に穴が作られていた］

船の基本的構造として、一部の船倉に水が入っても、全体の船倉に行かないように壁板で仕切る。カズワンの場合、四つの船倉に分けて、それぞれ仕切る壁がある。その仕切り壁にわざわざ穴をあけていたことが、出港の3日前の船舶検査で指摘を受け、運航会社はその穴をふさいだという。しかし、指摘を受けなかった前方二つの船倉を仕切る壁の穴はふさがなかったのだろう。この穴がいつあけられたかが問題になる。船舶検査の前だったら、検査の見落としになる。たとえそうであっても、運航会社は、2カ所の穴が指摘されたのだから、その穴も「塞ぐべきもの」だったことは自明だろう。

カズワンの船倉は、船倉1、船倉2、機関室、だ機室の四つに分かれる。カズワンにとって船倉1と船倉2は大きな空間を占める。その穴によって船倉1に入った海水が船倉2にも入ってしまうと、かなり危なくなることが推定できる。

なぜわざわざ仕切り壁に穴をあけたのか、運航会社の関係者に聞いてみたいところだが、おそらく、船底にたまった海水をくみ出す効率が良くなる、などのささいな理由だろう。しかし、それは沈没の可能性を高める「細工（さいく）」だ。何のための仕切り壁かを知っていれば、そんな細工はあり得ない。船の構造が全く分かっていない者の仕業（しわざ）だろう。

ハッチカバーが外れていたことで船倉1に海水が入っ

た。仕切り壁に穴があいていたから、船倉2にも海水が入ってきたと推測される。なお、カズワンでは、エンジンが止まってしまったのだから、機関室にも浸水した可能性が高い。

［文吉湾に避難しなかった］

知床岬周辺では、海がしけたとき漁船の遭難が相次いだため、緊急避難用に文吉湾に停泊できる港湾施設が作られたという。確かに、私のすこし古い地図（スーパーマップル13［2012年版］）にも、文吉湾を囲うような防波堤が描かれている。

カズワンの場合、知床岬を回り、引き返す途中で、カシュニの滝付近の沖に沈没した。知床岬で波風が強くなって航行困難になったと考えられるから、帰るのはあきらめて、文吉湾に入ればよかったという地元関係者たちの声が上がっている。その通りだろう。ここでも、船長の判断ミスが疑われる。もしも、文吉湾に停泊することになると、客たちの食事や宿泊先を考えなければならないから、運航会社の出費となる。あのケチな社長では承諾しそうにない。海がシケたことを聞いたとき、社長は「いいから、帰ってこい！」と船長に言い放ちそうだ。通信が途絶えていたから、それもできなかった。

⑤　口座の４６３０万円はオレのもの

【毎日新聞朝刊2022/5/19 社会

山口・阿武町、誤給付された男性、４６３０万円を「カジノに全額使った」

海外の複数のオンラインカジノがある。】

【毎日新聞夕刊2022/5/19 社会

４６３０万円、誤給付、銀行前で返金拒否、不法利益の疑いで２４歳逮捕。町によると４６３０万円が誤給付された４月８日に町職員が家を訪問。返還手続きを依頼された田口容疑者は同意し、公用車に同乗して銀行に向かったが、銀行の前で立ち止まると、「やはり今日は手続しない。後日公文書を郵送してくれ」と拒否。車で帰宅中に、「ここで降ろしてくれ」と言って、途中で車を降りたという。】

【毎日新聞朝刊2022/5/20 社会

山口県警は、誤給付された４６３０万円を別の口座に移した２４歳の男を逮捕。５月８日に、山口県阿武町が誤給付を男に知らせ、銀行で振替手続きをお願いしたが、男はその日の手続きを拒否。その後２７回にわたって、１０日間にほとんど口座の金はなくなった。

４６３０万円は、新型コロナウイルス対策の臨時特別給付金で、４６３世帯分だった。誤った入金と知りながら、うち４００万円をオンライン決済サービスの代行業者の口座に振り込んだとして電子計算機使用詐欺容疑とした。男は容疑を認めている。】

【毎日新聞夕刊 2022/5/20 近事片々

「油断があったかも」と町長が反省の弁、阿武町の４６３０万円誤給付、口座を差し押さえ手続きせず。】

【毎日新聞朝刊 2022/5/22 社会

山口・阿武町誤給付、容疑者は４月８日から１８日までの間、業者への振り込みを２７回繰り返していた。町は一部の口座について差し押さえの仮処分を申し立てている。】

【毎日新聞朝刊 2022/6/9 社会

阿武町誤給付、田口容疑者「町職員とのやり取りでたまったストレスを発散したくなった。うまくいけばお金を増やすことができるかもしれない」】

この給付金は、コロナ禍で経済が低迷するなかで、生活が困窮しているだろう低所得者のために、町が住民の中の低所得者４６４人に１０万円ずつを給付するためのものだった。誤給付された男をＡとしよう。Ａの銀行口座に誤って４６３０万円が振り込まれた。

Ａは誤給付で口座に入金された金と知りながら、「ネットカジノで全部使い込んだ」と開き直った。〈だから、もう返せない。請求をあきらめてくれ〉と、阿武町に、返還を突っぱねたわけだ。

町長は、憮然とした表情で、「はい、そうですか、と言うわけにはいかない」と、マスメディアのインタビューで答えていた。心の中では「ナニー、４６３０万円をカジノですっただと？　てやんでぇ、もっとましな言い訳をしてみろ！」と煮えくり返っていたことだろう。

ネットカジノで全部使い込んだ、という言い訳は、ウソだとは言いきれない。十分にあり得ることだ。カジノでは、大金を賭けて、負けが込んでしまえば、たちまちゼロになる。マイナスに陥ることもありうる。傍らから「そんなに賭けて大丈夫ですか？」と親切に言ってくれる人などいない。「おにいさん、いい度胸をしているね」と感嘆する人はいるかもしれない。心の中では〈いいカモが来ている〉

５月８日、誤給付に気づいた町役場の職員がすぐにＡの自宅に押し掛けた。Ａは「返せ」という一点張りのような傲慢で威圧的な態度に腹を立てたと証言して

いる。その態度が気に入らなかったわけだ。Ａが態度を硬化したのは、職員たちの言動に問題があったのかもしれない。

金に縁のないようなＡに対して、自分たちのミスをひたすら謝り、口座振替を丁重にお願いするしかなかったようだ。平身低頭して、謝るべきだった。「我々のミスで、あなた様の口座に、他の人の給付分を入れてしまいました。その分の振替手続きをお願いします。お手数をおかけします。もうしわけありません」と言うべきか。

おそらく、彼らはＡを、犯人を連行するように公用車で銀行まで連れて行き、「さあ、手続きしてくれたまえ」と促したから、Ａはカチンときたわけだ。

男は銀行まで来たが、返すのが惜しくなった。「自分の口座に入った金だ。もうオレのものだ。そもそも間違って入金したテメーたちが悪いんだ」と、心が怒りに変わる。いじわるしたくなる。

Ａは思う、「オレの口座の金は、オレのカネだ、このカネをどうしようとオレの勝手だ。オレが手続しないと、役場の者にはどうしようもないのだ。これをすんなり手放す手はないなぁ。願ってもないボタモチじゃないか。天の恵みだ。金に恵まれない生活をしているオレに、天が恵んでくれたのだ。一時的にせよ、口座中の金はオレの自由になる金だ。使ってやれ。使ってしまったと言えば、役場のヤローどもはあきらめるだろう。これを元手にしてオンラインカジノで勝負してみよう、がっぽり儲けられるかもしれない。儲かった分は、正真正銘のオレの金だ。返すのはそれからでもいいだろうよ。すったら、すったで、もうカネはないよと言えばいいんだ」

しかしながら、自分の口座に入金されたとはいえ、自分の金（あるいは自分の自由になる金）になるわけではない。それが阿武町の金であることは、確かだ。それを使えば、単純に横領だろう。

銀行口座の金は、それなりの手続きをすれば、差し押さえることが可能だった。町がすぐに差し押さえる手続きをすれば、Ａによってその日から１８日までに２７回繰り返され、ゼロに近い残金になるまで引き出された行為を防ぐことができた。阿武町の職員には「ぐずぐずすると、Ａがカジノで全部すってしまう」という発想はなかった。Ａが返還手続きを取ってくれるものと信用しすぎた。Ａがその信頼を裏切ったことになる。

これも阿武町の大きなミスだろう。相手が返還を渋

っているから、合法的に差し押さえるべきだった。
　最終的に町は、振込先を調査し、特定した。たまたまAが税金を滞納していたから、それができたという。そして、ネットカジノに関係して振り込んだ先の複数の決済代行業者からほとんど取り戻せたから、よかった。決済代行業者がすんなり返してくれたことが、奇跡的なことだろう。彼らが警察などに取り調べを受けると、今後の業務に差し支えがあるとの判断があったかもしれない。だいたい、彼らのカジノは公認されているのだろうか。

⑥ カジノは共食い

【毎日新聞朝刊 2019/9/4 神奈川
横浜ＩＲ論戦開始、２２日の記者会見で林氏は時折色をなして反論した。会見終了直後に自室に戻ろうとした際、すりガラス越しに林氏が書類を投げるような様子がテレビカメラに捉えられ、明朝の番組で報道された。林氏「手がすべったことは間違いない」】
【毎日新聞朝刊 2020/1/26 神奈川
林文子・横浜市長、市内会合で言及。ＩＲで「ものすごい、ぼろくそに言われている」とこぼす一幕があったが、ＩＲ誘致を目指す決意を語った。】
【毎日新聞朝刊 2021/12/28 総合
大阪市のＩＲ誘致、土壌対策に７９０億円。松井市長の意向が強く、大阪市が異例の負担。】
【毎日新聞朝刊 2022/5/28 社会
ＩＲは「共食い」、米国ではあちこちでカジノ周辺の産業が衰退に追い込まれている。】
【毎日新聞朝刊 2022/5/23 社会
ネットカジノにはまる若者、２４時間無制限、高いスリル、コロナ禍で依存急増。】

　ＩＲ（統合リゾート）とは、何のことが分かりにくいネーミングだが、複合的娯楽施設を指している。カジノを含むことが一番の特徴だ。つまりその中で、公認の賭博（とばく）場を開設しようとしているわけだ。
　政府が音頭を取って誘致を促進するほどのものだろうか。ギャンブル依存症になるなどの批判が多い中を押し切るだけの、メリットがあるというだろうか。
　ひとつに、ＩＲが税収を上げるための施設として有望視され、「金持ちから、お金を吸い上げよう」という発想があるのだろう。〈田舎から出てきたような初心（うぶ）なお金持ちをギャンブル漬けにする〉ことを目論んでい

たりして。

ＩＲではそのエリアに立ち入るだけで入場料がとられるというから、お金持ちに限定の遊び場だろう。娯楽施設で、お金持ちにジャンジャンお金を使ってもらい、政府や地方自治体がその何割かを税金として吸い上げる魂胆なのだ。それが地方の活性化にもつながるというわけだろう。庶民にとって縁遠い施設であっても、一向にかまわないのだろう。ＩＲのカジノは一般市民が気安く利用する施設でないとなると、一般市民はまた反対しそうだ。

そんな施設ができれば、雇用が増えるという一面があるかもしれない。

神奈川県・横浜市では、先年、当時の林文子市長がそんなメリットを考え、ＩＲ誘致を強引に（？）に推し進めようとしたが、反対にあい、結局、市長選挙にも失敗し、その計画は取りやめとなった。ビジネスライクな彼女は「税収アップにつながることなのに……」と切歯扼腕したことだろう。

射幸心（僥倖や偶然をあてにして利益を得ようとすること……広辞苑）をあおるものだから、カジノを、のるかそるかのゲームとみなす考えもあるだろう。ゲームを楽しむことでは、娯楽の範囲内かもしれない。熱中しすぎて、依存症になってしまう人もいることはもちろんだ。

運任せの世界であり、合意づくで、相手の金を自分のものにできる。あるいは、自分の金を相手に渡さなければならない。お金を右へ左に回すだけで、生産性のない行為をする。勝者には、他人からかき集めた金を得たことで、一時的な、空しい多幸感があるかもしれないが、運を天に任せるだけでは、トータル的に何も得られない。ゼロサムどころか、胴元が取る分、客たちはマイナスになる。自分の技量や情報のよしあしで、勝つ確率が高まるような知的ゲームであれば、勝つ確率が上がり、職業にすることもありうるが、０．５以下の勝率では割が合わない。

カジノ（賭博）が「共食い」の場であるとは、面白い表現だ。中には肥る人もいるかもしれないが、賭ける人の半分は身をすり減らすことになる。結局、確実に太るのは胴元だけだ。

ふとした疑問を言うと、対価や商品を伴わないみのだから、お金の流れがあったにしても、それを経済活動としてカウントしていいものだろうかという疑問が生じる。お金をやり取りしているだけのことでむなしいところがある。

外国から客が来てくれれば一番いいのかもしれないが、近年は、カジノという特定の場所にわざわざ行かなくても、オンラインで博打ができるようになっているから、わざわざ遠方からＩＲに来るまでもないことかもしれない。カジノに引き寄せられてＩＲを訪れる客がどれほどいるか、疑問になってくる。

外国の例をみても、周辺地域にいくつかの悪影響が出ているとの指摘がある。

自治体が、メリットばかりに目が行ってＩＲを誘致し、思惑どおり税収を上げられるか、それとも客が来ない（しみったれた客ばかりだったりして）、閑古鳥の鳴く施設になってしまうか、ほとんど「博打の世界」だろう。

世間に、カジノに対する拒絶反応（健全な反応かもしれない）があるとみる。住民らの反発によって誘致ブームが下火になり、誘致を断念した自治体がいくつかある一方、本年７月時点で、まだ大阪市（夢洲）と佐世保市（ハウステンボス）がそれぞれの地を候補地としてＩＲの誘致を目指している。期待と不安の中で。

⑦ 小松基地Ｆ１５墜落

【読売新聞朝刊 2022/2/1 社会
空自Ｆ１５墜落か。小松基地を離陸直後、海上に機体の一部。操縦していた隊員２人が行方不明。漁港にいた人「日本海の沖合で赤い光が見えた」　同機は高い技量を持つパイロットが集まる飛行教導群に属する。】

【読売新聞朝刊 2022/2/7 社会
Ｆ１５戦闘機事故、不明１週間、１月３１日午後５時ごろ訓練のため小松基地から離陸し、１～２分後にレーダーから消えた。小松基地から西北西約５キロの日本海に墜落したものとみられる。ベテラン２人搭乗、一言も連絡がなかった。元空将の永岩俊道さん「一言も発せず墜落したのなら、熟練のパイロットでも対応できない突発事故が起きたか、平衡感覚を失う空間識失調で危険を察知できないまま事故にあった可能性もある」】

【毎日新聞夕刊 2022/5/12 総合
石川県小松基地沖に墜落したＦ１５の原因は２人が平衡感覚を失う「空間識失調」に陥った可能性が高いとの調査結果を公表した。機体に不具合はなく、人為的な原因と判断した。事故当時、雲の中で操縦士の視界は悪く、離陸直後から右旋回させる難しい飛行条件だったという。】

本年1月31日に起きたF15戦闘機の墜落事故の調査結果が5月に出た。約3か月余りの調査期間だから、比較的早めの決着だろう。機体に不具合はなかったことを強調している。機体の不具合が疑われると、調査が長期になってしまい、飛行再開が遅れてしまっては不都合だ、という事情があるからだろう。

F15といえば、空自（航空自衛隊）が運用している戦闘機の主力であり、100億円以上の高価な機体だ。やや旧型になりつつも、その戦闘力は世界でも引けを取らない。世界では実績があり、イラク戦争などの実戦で出撃したが、2機撃墜されただけ（空中戦では0）を誇っている。

空自としては、機体を失い、さらにベテランパイロット2人を失ったことは、ショックだったろう。彼らは、飛行教導群に属していたというから、教官クラスであり、若いパイロットを指導する立場にあった。さらに、墜落によって、地元住民に不安を与えたことも大きい。

この事故は離陸直後に墜落した。たまたま海に突っ込んだが、もしも陸上に墜落したら、大ごとだった。燃料を満載していたはずで、それに火が付いたりして大炎上したことだろう。今回は海上だったから炎上しなかったが、燃料が漏れて海を汚したかもしれない。

原因として挙げられたのは当初から、空間識失調だった。ベテランパイロットが空間識失調に陥いるというのも、なさけないことだ。パイロットが戦闘機を急激に旋回させたりすると、パイロットの体にはG（重力の単位）がかかり、体の血液が脳に流れなくなり、失神することがよく知られている。あるいは、方向感覚が失われる。自分がどこをどう飛んでいるのか、わからなくなる。その時は声も出せない。空間識失調とされる症状だ。パイロットは、血流が下半身に下がらないようにするための特殊スーツを着て、その対策をとっているが、それが十分に効かなかった可能性もある。そんなとき。機体に大きな負荷がかかり、壊れる可能性もあるのだが、今どきの機体は丈夫に作られているので、パイロットのほうが先にまいってしまう。

空間識失調は一時的で、まもなく回復するものだが、飛行高度が低いと、それが回復する間に、機体を立て直す前に、地上あるいは海上に突っ込んでしまう危険が高い。

この機体は、離陸直後、右に旋回した。その旋回中にパイロットの空間識失調で墜落したと考えられたわ

けだ。右に旋回する操作が急すぎたことになる。
それが人為的な原因として報告書に書かれたが、〈機体がパイロットを空間識失調に陥られた〉とも考えられるから、微妙なところだ。人為的と言っては、「故意に墜落させたというニュアンス」が生じてしまうから、語弊がある。パイロットのせいにされては、英霊として、うかばれないだろう。

⑧ 敵基地攻撃能力を言い換える

【毎日新聞朝刊 2022/1/8 一面、焦点
２プラス２、「敵基地攻撃」を議論へ、日本は「極超音速」を強調。「台湾有事」を念頭に共同計画作業を進める。】
【読売新聞朝刊 2022/1/30 政治・経済
「敵基地攻撃」改称論。公明「先制と誤解される」】
【毎日新聞夕刊 2022/5/17 特集ワイド
「敵基地攻撃能力」←「反撃能力」に改定。
・本質隠す姑息な手法
・政府は解釈説明せよ
・名と実で大きな隔たり
言い換え、裏に別の意図。】

近い将来、防衛費をＧＤＰの１％から２％のレベル（つまり２倍に）に引き上げようとしている日本政府は、軍拡競争に走り出している。その主な増強の一つが「敵基地攻撃能力」であるわけだ。
その軍備に関し、政府は言葉によるごまかしをまたやっている。ネーミングのセンスの悪さだろう。
古くは、１９５４年（昭和２９）防衛庁設置法により自衛隊という名の防衛組織を設立したことから始まる。自衛隊は、実質的な軍隊であり「日本軍」だけれど、そう名乗れない事情があったわけだ。それは今に至っても、引きずっている。
「敵基地攻撃」では、確かに露骨な表現だった。それでは、他国が警戒してしまうし、外交的に抗議するための格好の標的になるかもしれない。ミサイルの射程距離などはすぐにわかってしまうから、自分らの基地が標的になることがすぐ知られる。
「敵」という表現がよろしくない。彼らが、日本に「敵」と名指しされるのも、気分のいいものではない。
「日本は、われわれの軍事基地を敵基地とみなしているのか？」
「攻撃」という言葉も、確かに露骨だ。日本は「専守

防衛」をモットーとするのに、「攻撃能力」と言っては差し障りがあるだろう。野党などから指摘される前に、与党内で敵基地攻撃能力の言葉を「反撃能力」に変えた。言葉を置き換えただけで、実質は変わらないのはもちろんだ。

「反撃能力」で、敵基地攻撃能力を意味することになるのだろうか。これは名称というより、符丁になってしまっている。専守防衛から逸脱することを隠したいという政府の思惑があるのだろう

政府はなんとか、言葉でごまかそうとするが、反撃能力では、あまりにもおおざっぱな意味を持つ言葉だから、どう解釈しても適切とは思えない。実を表していない。反撃能力では、敵基地にミサイルを撃ち込むという実態が見えなくなっている。

「敵基地攻撃能力」から「敵基地」という言葉がとれたということは、敵基地に限定しないことを意味する。敵の重要施設（例えば、原子力発電所、元首の公邸・私邸）にも狙いを定めることがあるという広い意味になる。射程内に入れば、やはりそれは脅威だろう。

反撃という言葉にも攻撃のイメージが付きまとう。敵側から見れば、そんな反撃能力は攻撃能力そのものであり、言葉で「反撃」とうたっても、「撃ちたいときに撃つ」ものであることに変わりはない。〈必要性がある〉という大義名分を用いて、いつでも撃ってくるのだろうと解釈される。

私なら、もっと明確に、限定的に、対ミサイル基地反撃能力という名称にしたい。

そもそも敵基地を攻撃するという最初の発想が、攻撃的だ。敵の領土を攻撃しないという「節度」を踏み外すことでもある。

政府は、敵から攻撃される脅威が喫緊にあって、その脅威が具体的に本格化すれば、それを撃破するのは自衛手段として成立する、などと説明するのだろう。

反撃能力とは「やられたらやり返せ！」ということで、その能力を備えることで、敵の攻撃に対する抑止力にもなると一般的に考えられている。「もしもやってくるなら、倍返しだ！」と脅す。

しかし、そんな能力を持つと、敵国も対抗上さらに威力を増強したがるから、軍拡競争を招くもとになる。

「やられてからでは遅い！」という考えもあるだろう。確かに、やられるのは避けたい。「やられる前にその攻撃能力を叩き潰してやれ」という議論も出てくる。

「ええい、それなら、先手必勝だ！　ミサイルを発射

準備している間に撃ちこんだれ！」
　敵がミサイルの発射準備中だとしても、それが人工衛星を打ち上げるロケットなのか、戦略サイルかの見分けは難しそうだし、どこを目標にしたものかもわかりにくい。先制攻撃して、間違ったでは済まされない。「一発やられてから」でないと、敵基地を攻撃していいことにはならない。これは、敵が第２弾のミサイルを準備しているときに、それを叩くという時にだけ、使用されるべきものだ。
　敵の最初の攻撃で自衛隊が壊滅状態になったら、反撃もできないだろうが、それはそれでしかたない。
　敵の攻撃を耐え忍んでから、一気に反撃するのが日本の美学だろう。挑発に乗って我慢できず、先制攻撃しても、結局、負けてしまうケースが最も恥かしい。

⑨　政府系金融機関の議員案件

【読売新聞朝刊 2021/8/7 社会
無登録で１００社の融資仲介した、と事業者が証言。公明秘書が関与した疑惑。東京都内で環境関連会社などを営む７０代男性が取材に応じ、男性は「秘書が議員事務所の存在を公庫に伝えてくれれば、政府系金融機関の融資審査が早くなると思った」と、経営に困っている会社を助けるためを強調。ただ、「仲介の際に謝礼をもらうこともある」と述べた。男性は、辞職した元財務副大臣・遠山清彦（52）公明党前衆議員の秘書に「金融機関の窓口紹介を依頼した」と話した。この男性は貸金業の登録を受けずに仲介したとして貸金業法に違反した疑いがある。】
【読売新聞朝刊 2022/2/10 社会
公庫融資問題、複数企業が優遇されたのは「遠山先生のおかげ」と、口利き効果を証言。公庫内部に議員案件の対応マニュアルが作成されていた。】
【毎日新聞朝刊 2022/4/26 社会
公明党・太田昌孝元衆院議員（62）の元秘書らは手数料として計約３９６０万円を受領していたことを認めた。融資額の３０％程度を手数料に設定していた。日本政策金融公庫は国会議員や秘書から依頼があった場合、公庫側は支店の課長クラスが融資希望者に速やかに面会するなどの「特別対応」をしていた。】

　国会議員や秘書が、業者からの依頼によって政府系金融機関に「口利き」をして、業者への融資審査を早めることをして、それら業者から手数料を受け取って

いたとは、限りなく汚職に近い。手数料は賄賂だろう。
政府系金融機関と政治家たち（国会議員）の癒着ぶりが垣間見える。政府系金融機関が政府の方針に沿った融資を進めるのは業務であるにしても、政治家の個人的な「口利き」に乗って、その特定の業者に融資をしてしまうのは、いいかげんすぎる。融資審査が甘くなっているわけだ。
公的に資金を扱っているのだから、素早い対応をしたとしても、審査を公正に行ってほしいところだが、案件のによって公正さが歪められてしまうのだろうか。
政府系金融機関が、仲介するものが議員の名前を示せば、ホイホイと特別対応することに、「宮仕え」の役人的な習性がみえている。その議員が財務副大臣なら、なおさら威光がまぶしいことだろう。たとえ融資に失敗し、不良債権化し、いくら焦げ付いたとしても、政府系金融機関の職員としては、痛くもかゆくもないのだろう。
公庫内部で作成されていたという「議員案件の対応マニュアル」を見てみたいものだ。
その公明党の公設秘書らは、貸金業の登録をしない人物の要請で口利きをしたから、問題になった。違法な仲介に関与したことになった。登録した人物ならば、堂々と口利きして、手数料を、好きなだけ取ればよかったのだ。公明党の関係者は、登録の有無を確認しなかった可能性がある。（自民党の関係者なら、常識だった？）
議員以上の政府要人の場合、さらに案件の重みが増すのだろう。首相案件なら、最優先だったりして。

⑩　ロシア軍の極悪非道ぶり

【毎日新聞夕刊 2022/4/12 一面
市街戦が続くマリウポリで、ウクライナ議員が、ロシア軍が未知の物質を使用し、被害者に呼吸不全などの症状が出ている、と報告した。】
【毎日新聞朝刊 2022/5/2 一面
ロシアが占拠したウクライナ南部ヘルソン州で1日からロシア通貨ルーブルへの切り替えを始めたと伝えられる。一部教員がロシア領に移送されて今の統治を正当化するための「再教育キャンプ」に入れられたとの情報もある。】
【毎日新聞朝刊 2022/5/6 一面
ウクライナ・ブチャ虐殺、深い傷。民間人を中心に4

００人以上が殺害された。】
【毎日新聞夕刊 2022/5/12 総合
ウクライナ、４８０万人失業。侵攻後、雇用の３割。ロシア軍の海上封鎖が続くことの影響も懸念される。】
【毎日新聞朝刊 2022/5/13 総合
ロシアがブチャでの虐殺はウソとして別の場所での動画を投稿。「遺体はない」と主張する。不利な情報を隠すプロパガンダ。】
【毎日新聞朝刊 2022/5/14 国際・ウクライナ侵攻
学校空爆相次ぐ。】
【毎日新聞夕刊 2022/5/23 総合
ウクライナ検察「ロシア軍が北部チェルニヒフ州で学校地下に住民３５０人を1カ月閉じ込めていた。】
【毎日新聞夕刊 2022/6/7 総合
ウクライナで性被害１２４件。安保理がロシアの責任追及。】
【毎日新聞朝刊 2022/6/14 総合
ウクライナ・ルガンスク州の要衝セベロドネツクと外部を結ぶ三つの橋すべてがロシア軍に破壊された。アゾト化学工場に民間人が約５００人取り残されている。】
【毎日新聞朝刊 2022/6/15 総合
人権団体「ロシアは無差別攻撃した」
ハリコフで数百人犠牲。クラスター弾などの無差別殺傷兵器を使用し、空中から地雷などを散布した。】
【毎日新聞朝刊 2022/6/24 国際
国境なき記者団は、ロシアのウクライナ侵攻を取材中の3月１３日、行方不明になったウクライナ人記者とその同行者が、首都キーウ北方の森で、ロシア軍に殺害されたと発表した。４月1日に遺体が発見され、殺害前に拷問されたとみられる。】
【毎日新聞朝刊 2022/7/15 国際
米国務長官がロシア軍によるウクライナ人の連れ去りが「最大１６０万人」に上ると公表した。うち２６万日は子どもという。
連れ去りは計画的で、チェチェン共和国でも見られたという。*1】
【毎日新聞朝刊 2022/7/16 一面
ロシア軍がウクライナに侵攻を開始した当日の2月２４日に、ロシア軍がチェルノブイリ原発にやってきた。すぐ占拠された。（武器を持つ守備隊がいたが、戦闘による原発の被害を避けた）　職員たちはロシア側からの規制を受けながらも、必死に安全な運転を行った。

３月２１日ロシア軍は撤収。１６９人を捕虜として連行するとともに、事務所などにあったパソコン、タブレット、携帯電話、電気ヒーター、折り畳みベッドなどを持って行った。
南東部にあるザポロジュ原発は今もロシア支配下にあり、強固な基地整備がされている。】

今般のウクライナ侵攻におけるロシア軍の極悪非道ぶりを、記事から拾ってみたが、氷山の一角だろう。
侵攻した地上部隊は、各地で、避難が遅れた住民たちを射殺して回った。なぜ、ロシア軍が、ウクライナ軍だけでなく、民間人までも標的にして、ミサイル攻撃し、砲弾を撃ち込み、５０００人以上を殺戮し、主要都市を破壊したのか、大きな疑問となるところだ。世界が注目する中で、わざとテロ行為を行っている。
一言で謎解きをすると、ロシアにとって、ウクライナは「裏切り者」であるからだ。「粛清」の対象にしている。「ロシアを裏切ったら、怖いぞ！」ということを世界中に見せつけている。本当に見せつけたいのは、ロシア国内の地方諸国、およびロシアに従属している関連諸国に対してだろう。
ロシア軍が極悪非道の行為に走ることによって、ロシアの恐ろしさを見せ付けている。「これは脅しではないのだ。今後も裏切ったら、実際にやってみせる！」というプーチンの冷酷な意思表示だ。
プーチンが核兵器の使用をちらつかせるのも単に脅しではなく、〈実際に使用してやるぞ〉というメッセージだろう。
たとえば、残虐行為の一例をあげると、

- キーウなどの都市にはミサイルが、昼夜わかたず、多数撃ち込まれた
- 主要な発電所に攻勢をかけた。チェルノブイリ原発をはじめとして、原発を攻撃し、占拠するという極めて危険な行為をした（ジュネーブ条約違反）
- 化学兵器（毒ガス）の使用をちらつかせ、マリウポリではそれを実際に使用した形跡があった。
- 人々が避難にしていた劇場を攻撃した
- 人々が集まっていた駅を攻撃した
- 病院が標的にされた
- 幼稚園を含む教育施設がミサイル攻撃された
- キーウ郊外の町まで地上部隊が侵攻し、ウクライナ軍の反撃にあって撤退したとき、町では民間人が多数虐殺された。特にブチャで虐殺された遺体が多数残された

・ロシア軍の撤収のとき、備品など多くのものが持ち去られた。兵士たちがこぞって略奪していった。
・婦女暴行、多数あった
・捕虜を拷問・処刑した。捕虜が、拷問によってロシアに不都合な人物とわかれば、すぐ処刑。
・そのロシア軍は、また、耕作地に地雷を多数仕掛けた。建物のドアや、遺体にも地雷を仕掛けられた
・避難経路にある橋を破壊。人々の避難を困難にした。包囲された民間人を逃がすために合意したはずの「人道回廊」の通行を妨害した。
・住民が多数避難している場所を何日も包囲した。食料・水の供給を遮断した。
・占領された地域で、多くの住民が連れ去られた（強制連行）。米国務長官によると最大１６０万人にも及ぶ。その中に子どもが２６万人いるという。
ロシアは自国領側に入ったウクライナ人のパスポートを取り上げ、もうウクライナには自由に返さない
・偽旗作戦を展開した。自分たちが仕掛けたことなのに、ウクライナ軍が破壊した、などと騒ぎ立てる。
「ウクライナ軍が原発近くに砲撃した」というのも、その一つ
・黒海で海上封鎖し、穀物などの輸出を不可能にした。港には機雷を敷設した。
・何百万人の難民・避難民をだした。

「どうだ、オレたちロシア軍は何をするか、わからんのだ。怖いだろ。早く降伏しろ！」という脅しの意味を込めている。いやがらせ的な行為でもある。
特に、プーチンに近いとされる精鋭の傭兵部隊「ワグネル」が、何をしても罪に問われないだろうことをいいことに、暴虐の限りを尽くしているといわれる。レイプなどは彼らの得意とするところだろう。
もちろん、プーチンには領土獲得の野心がある。占領したウクライナの地に、ウクライナ人たちを排除し、親ロシア派の人を入れるつもりだろう。住民たちが避難して、他国に移れば、手間が省けることだろう。ロシアが占領した東部地域には、住民たちの多くは戻れないだろう。
ロシアのウクライナ侵攻は、「ウクライナがロシアにとって脅威になってきた」と言いがかりをつけて、プーチンが始めた戦争だ。プーチンのウクライナ脅威論であり、侵攻を正当化する。しかし、軍備において弱小国のウクライナが、戦略上、ロシアにとって脅威になることは、遠い将来においても、ありえなかった。

プーチンがウクライナ侵攻した「言い訳」のいくつかをおさらいしてみよう。

・ウクライナがＮＡＴＯに加盟しようとしている。プーチンの言い分「ウクライナでの軍事的中立は約束事だ。ウクライナがＮＡＴＯの拡大を助長すれば、ＮＡＴＯは、ウクライナの国境付近にモスクワをターゲットにした中距離弾道ミサイルをずらりと並べるに決まっている。それではロシアはたまったものではない」

・ウクライナで、ネオナチが台頭してきた。右派の戦闘部隊「アゾフ大隊」を念頭に入れてのことだろう。（もともとは極右グループを中心に結成された。ネオナチ思想との関連性が指摘されたことがあったが、実態は単に愛国的なグループだろう）

・ウクライナに、アメリカの生物化学兵器の研究所がある。

・ウクライナが、核兵器を開発しようとしている。

・ウクライナが、東部地区の親ロシア派住民を排斥・虐待している。虐殺もされた。

プーチンは、あることないことを並べてウクライナ脅威論を主張しているが、そんなことは、ロシアの誇る諜報機関がまじめに調べれば、それらが事実でないことがすぐわかることだ。プーチンはウクライナを悪者にしてロシア側のすべての極悪非道を正当化する。

プーチンはそんなウクライナ脅威論を説いてロシア国民をだましていることになる。情報統制をさらに強め、都合の悪い事実を報道するジャーナリストあるいは報道機関があれば、スパイ扱いするなどして徹底的につぶしているから、プーチンのウソがほとんどばれない。

そして、ロシア国防省は、たとえば、民間施設を爆撃しておいて西側から提供された兵器貯蔵所を破壊したと大本営発表する。ある地域を武力制圧すると、「その地域を解放した」と表現するのが、私としては気に障ってしまう。

なお、ウクライナには役人たちの汚職体質が根強くある。西側では問題視しており、ＥＵ加盟への障害になっている。ウクライナの悪口を言いまくっているプーチンは、そのことについては何も言わない。（自分自身が汚職体質だから？）

近年（特にゼレンスキー大統領就任以降、子分格だったウクライナが、ロシアの勢力圏から離反し、西側に近づいたことを、プーチンは大いに気に入らないか

ら「裏切りもの」呼ばわりする。つまり、プーチンの真意は、裏切りもの・反ロシア派が主流となったウクライナ人たちを粛正し、ウクライナ領土の一部を分捕り（できればその全部を取りたかった）ロシアの領土拡大を目指したものだろう。

現況は、プーチンの「夢半ば」というところだろう。ウクライナ側の損害・犠牲などぜんぜん意に介さないし、ロシア側の損害にしても、目標が達成されれば、大したコストではないのだろう。「いずれにせよ、オレの地位は揺るがない。なにしろ、今のオレは大ロシアの皇帝以上の存在なのだ」と吠えていることだろう。

プーチンは皇帝以上の存在かもしれないが、このウクライナ侵攻でその手足が思うように動かない事象がいくつか出てきた。黒海艦隊旗艦モスクワが撃沈された、ゼレンスキー氏の暗殺に複数回失敗した、ロシア軍の将官クラス（司令官）１２名戦死、首都キーウ攻略失敗、戦闘の長期化、ロシア兵の戦死者多数……。

もうプーチンとしては、何らかの形で戦果が得られないと、引き下がれない。東部地区を掌握することが必要条件だろう。武力に勝る大国が他国の領土を奪い取るという形になる、それは昔から歴代のロシア皇帝がやってきたことだろう。

その地から住民たちを追い出すため（居残るものがあれば、連行して強制移住や再教育施設に入れる）、住居などの建物やインフラは壊しまくる。破壊は建設に通じることなんだろう。

補足説明 *1．１９９０年代のチェチェン紛争で、ロシアからの独立を求めたチェチェン勢力を、プーチン司令官の指揮による強権的手法で完全に抑え込んだ。チェチェンの首都グロズヌイを破壊し尽くし、人々を離散させた。彼の冷徹なやり方の一つの原点だろう。

⑪ 安倍晋三元首相暗殺

【毎日新聞夕刊 2022/7/8 一面

安倍元首相、心肺停止、８日１１時２５分ごろ奈良市で自民党公認候補の応援演説中、背後から撃たれた。】

【毎日新聞朝刊 2022/7/9 一面、総合、社会、写真特集

演説開始から１～２分後、５００人の聴衆が集まっていた近鉄大和西大寺駅周辺で、山上徹也容疑者（41）はショルダーバッグから銃のようなものを取り出し、元首相の背後へ近づき、２発撃った。「バーン」「バ

ーン」という音とともに白い煙が噴き出た。鉄パイプ２本を並べ、黒いテープで銃床に巻き付けた手製の銃だった。「拳銃をたくさん作った」
容疑者は２００２年から３年間、海上自衛隊に勤務、小銃を取り扱う訓練を受けていた。
逮捕後の供述によると、「安倍氏の政治信条に恨みはなかった」「特定の宗教団体の幹部を狙っていた」
その宗教団体の幹部は現場にいなかった。】
【読売新聞朝刊 2022/7/9 一面、総合、社会
県警が現場で発見したのは長さ４０センチの手製の銃のようなものだった。県警は山上容疑者宅を捜索し、手製とみられる銃を数丁押収した。
容疑者が接近したとき、制止はなかった。一発が心臓に達し、壁に穴が開いていた。】
【毎日新聞朝刊 2022/7/12 社会
山上容疑者「団体を日本に入れたのは岸氏。孫の安倍氏も国内で広めたと思って狙うようになった」と供述。
その団体が家庭を壊したとする。韓国発祥の世界平和統一家庭連合の前身、統一教会は、１９８０年代以降、不安をあおって高額なツボなどを売りつける霊感商法とのかかわりがあると指摘された。キリスト教系とされる宗教団体。
「団体の関連施設で手製銃の試し撃ちをした」と供述した。前日、７日未明に奈良県の団体関連施設と隣接するビルに複数の弾痕が残っていた。】
【毎日新聞朝刊 2022/7/14 社会
世界平和統一家庭連合の田中富弘会長は１１日記者会見し、「過去に献金トラブルもあったが、２００９年からコンプライアンスを徹底した。今は献金の強要はない」と説明したが、弁護団（全国霊感商法対策弁護士連絡会）によると、献金強要の相談は今も続いている。２１年は４７件、総額３億３１５３万円。
２１年に確定した民事裁判では、元信者の女性が献金の返還を求めた訴訟で、東京地裁が「献金の要求は不安や恐怖をあおる不当な方法だった」とし、勧誘した連合側に約４７０万円の返還を命じた。】
【毎日新聞朝刊 2022/7/15 社会
同僚に業務の手順違反を指摘されたとき、同僚と激しい口論、「そしたら、お前がやれや」
３月以降は無断欠勤が目立ち始め、職場で孤立を深めた。工場の責任者「当初はまじめだったが、急に口調が荒くなり、反抗的な態度をとるようになった」
このころ、山上容疑者がインターネットで視聴したとされるのが「世界平和統一家庭連合」の友好団体が２

１年９月に開いた集会で安倍氏がトランプ前大統領とともに寄せたビデオメッセージだ。
山上容疑者「春に安倍氏の動画を知り、統一教会とつながりがあると考えた。殺そうと決心した」「教会トップの襲撃も計画したが、接触が難しく、安倍氏にきりかえた」
山上容疑者は職を失った５月以降生活に困窮して追い詰められていた。事件当時の所持金はほぼ底をついていた。】
【毎日新聞朝刊 2022/7/16 一面
伯父（77）によると、山上容疑者４歳の時、父が自殺。一歳上の兄は幼い時に小児がんで右目を失明した。母親は山上容疑者が小学生だった１９９１年に団体に入った。多額の献金をして１９９８年に入信した。入信のときに２０００万円、間もなく３０００万円を、３年後に１０００万円、その後も献金を続け、総額１億円になり、破産した。
海上自衛隊に入隊した山上容疑者は、24歳だった２００５年１月に自殺未遂を図った。山上「自分の生命保険金を兄弟に渡したかった。団体のせいで人生ぐちゃぐちゃだ」】
【毎日新聞夕刊 2022/7/16 社会
「圧力鍋の爆弾を作った」
爆発によって不特定の人に危害が及ぶことを避けたという趣旨の説明もしている。】

・動機

７月８日、奈良市で安倍晋三氏が街頭応援演説中、聴衆の一人に銃撃され、数時間後死亡した。私はそれを暗殺と表現したい。

安倍晋三氏は２０２０年９月に長期政権の首相の座を降りてから、約２年、まだ、その政治的影響力は健在だった。安倍氏は自民党の最大派閥「安倍派」の会長にだったし、現政権に対して影響力を保持していた。時折、ニュースになる特異的な発言もしていた。発言に重みがあり、その言動には常に内外で注目されていた。ネームバリューが抜群だから、今般の参院選（７月１０日投票日）では、自民党候補者たちの応援演説に引っ張りだこで、各地を飛び回っていた。

とはいえ、暗殺した理由として、容疑者・山上徹也は「安倍氏の政治信条に恨みはなかった」とはっきり言っている。「安倍氏が特定の宗教団体に近しいかかわりを持ち、国内に信仰を広めるのに一役買っていたから」という意味の供述をしている。「母親が特定の

宗教団体にのめりこみ、金をつぎ込み、破産状態になったことで、宗教団体を恨んでいる」と言っている。

特定の宗教団体とは、通称・統一教会であることが明らかにされた。「初めに宗教団体の幹部を狙ったが、それが不可能なことがわかり、安倍氏を狙った」

つまり彼の動機が宗教団体への恨みにあることが分かってきた。彼のこれまでの供述では、「宗教団体、憎し」の思いが、安倍氏暗殺計画につながったわけだが、それは「かなり飛躍した論理」であると思えることだ。安倍氏を暗殺したことで、宗教団体への恨みが少しは晴らせるのだろうか。

統一教会（韓国発祥、キリスト教系に分類される）は、１９８０年代以降、世界進出し、各地で数々の問題（金銭に絡むこと高額商品の売付や献金強要、信者やその子女を適当にマッチングさせて結婚させること*1）を引き起こし、不評があったためか、現在「世界平和統一家庭連合」と名称を変えているが、基本的に同一性が高いものだ。ネーミングを変えて批判の矛先を変えようとしたものだろう。また、２００５年には天宙平和連合という別組織を作っているが、グループの派生だ。その他いくつかの派生組織がある。転移した、というイメージがわきあがる。先日、世界平和統一家庭連合の田中富弘会長が記者会見した説明では、安倍氏は世界平和統一家庭連合を支援・広報したのでなく、天宙平和連合（教団関係者は略してＵＰＦと呼ぶ）の方だと言い張っていたが、一般的には同じグループに属するものだから、山上が同じ統一教会という認識をしても、的外れではない。さらに、その幹部は、山上の母親が現在、世界平和統一家庭連合の教会員であることを認めている。彼らは旧統一教会とは一線を画しているようだが、その実は変わっていない。

山上は先ず教団の最高幹部を狙ったが、断念していた。教団の最高幹部といえば、文鮮明*2を思い浮かべるが、彼はもう故人だ。そのあとを引き継ぐ者が韓国にいて、コロナ禍の前は頻繁に日本と韓国を行き来していたというから、彼は来日の時を狙っていたわけだ。しかし、追跡することができず、信者でもない者が武器を持って最高幹部に近づくのは困難だと悟り、あきらめたわけだ。

その代わりとして、次点の安倍氏に向けられたわけだ。つまり彼にとって統一教会は悪徳宗教団体であり、安倍氏はその教団の主要な人物の一人〈入信をそそのかしていた〉という認識になる。安倍氏なら、今般の応援演説で出没する足取りがネットで分かる。彼の宗

教団体に対する長年の恨みを晴らす時だと思ったことだろう。そして彼は、その宗教団体を日本に招き入れたとして岸信介・元首相（1896～1987）を恨んだ。安倍氏はその孫だから、という理由も述べている。

〈宗教団体がその魔力のような手法で母に多額の献金をさせた。そのために一家が経済的に困窮し、路頭に迷うことになった〉という思い込みで、山上は「その宗教団体が悪い」と決めつけたわけだ。その家庭崩壊から約２０年、彼とその一家は苦境から抜け出せなかった。母は懲りずに、まだ信仰している。その宗教団体の関係者への積年の恨みが募っていた。執念だった。ただし、それは彼自身の性格・資質・環境の変化によるものによるかもしれない。

この事件で、世間的にその教団が注目され、バッシングの対象になったりするならば、彼の思うつぼかもしれない。

*1．合同結婚式が有名。でたらめなマッチングのため、つまりミスマッチで離婚せざるをえない悲劇を少なからず引き起こしている。

*2．文鮮明（1920-2012）統一教会の教祖。19歳の時、日本に留学し１９４３年に早稲田大学付属高等工学校を卒業したとあるから、日本との縁が深い。しかし、彼が日本にいい印象を持っていたとは限らない。韓国にもどり、幾多の苦難の末に、１９５４年にソウルで世界基督教統一神霊教会を設立した。日本では、１９５９年に日本統一教会を設立した。彼の死後、妻の韓鶴子（ハンハクチャ）（79）が大きい存在になった。

・宗教

カルト宗教、まやかし的宗教、詐欺的宗教（霊感商法など）があるのは知られていることだが、まじめな宗教もあるし、哲学に近い宗教もあるから、その判別は難しい。統一教会は前者のほうだったという指摘がある。多くの宗教は、多少なりとも、そうした傾向があるものだろうけど。

信仰によって、安らぎが得られるところがあるし、人としてのモラルが保たれる場合が多い。母親にしても、納得ずくで寄付したり、喜捨したりしたもので、本人は後悔していないだろう。母親はその宗教におカネ以上のものを見出したのかもしれない。憲法で宗教の自由が保障されているように、母親の信心について、息子であっても口をはさむことはすべきでない。母親が認知症でない限り、彼女なりの思惑や苦悩があったものだろう。

人がどんな宗派に属そうと、信条を持とうと、たと

え邪教であっても、異端に思えても寛容でありたい。自分は無視すればよいことだ。ただし、この宗教団体は、信心深い信者に、多くの寄付（献金）をすることを仕向ける傾向が強い。それが家計を傾けてしまう要因になれば、経済的な困窮に発展するから、別かもしれない。

「その宗教団体を安倍氏が国内に広めた」ことが事実であっても、それは個人的な裁量の範囲内というもので、安倍氏の［悪意］は感じられない。むしろ、［好意的］だったかもしれない。安倍氏も信奉者の一人だったのだろうか。知名度の高い安倍氏が起用されたのかもしれない。安倍氏がそんな宗教活動に熱心だったとは、ほとんど知られていない。

そもそも、政治家が組織的な票集めのために、宗教団体に近づくことはよくあることだ。政治家には、許認可にかかわる口利きをすることがある。宗教法人の認可にもかかわることだろう。宗教団体と政治家の結びつきは、双方に利があることだ。特に、統一教会グループは政治家に近づいていた。その集会で世界的に高名な政治家たち（アメリカ大統領など）に飛び切り高い講演料を出して招き、スピーチ（ほとんどあいさつ程度だろう）してもらうことなどが多々あった。

・教団のカネ集め

教団がふんだんに資金を使う原資は、やはり信者から集めるものだろう。特に、統一教会が金を集める手法は、強引であり、執拗であり、脅迫的であることがだんだん明らかになっている。

山上の母のように自己破産した例も多い。自己破産しても、さらに献金の要求が続いたという話も聞こえてくる。記者に取材された人の中には、「先祖の供養をしないと天国に行けない」と脅された信者もいた。つまり、〈献金しないと地獄に落ちるよ〉といわれてしまったのだ。

「教会関係者に見せられたツボから観音さまが出てきた」――手品を見せられたのだろう。

信者にとって献金は善行だから、「神の使い」のような人物に出せと言われれば、カネに糸目をつけないで、いくらでも出してしまいそうだ。金銭感覚を失ってしまう。

統一教会の場合、一度多額の献金をしても終わりでなく、それに飽き足らず、さらに献金をさせ続ける手口が目立った。（これはオレオレ詐欺の手口と同じ）

宗教法人は、一般法人のように利潤を追求する団体ではない。税制の面で何かと優遇されているから、荒稼

ぎする必要はないはずだが…。

・母子家庭

両親はともに高学歴で、母は建設会社の社長の娘、父はその会社の役員に上りつめていた。山上徹也が４歳の時、ビジネスの成功者だったはずの父が死んだ（ノイローゼで、酒乱の傾向が出ていったとされる）。

母子家庭（子ども３人。兄、徹也、妹）となった。祖父（建設会社の社長）のところに身を寄せた。一歳年上の兄が難病（小児がん）になった。

その祖父も病死したときに、母は統一教会にすがった。母は入信し、１９９８年に会員になった。山上が高校生の時だ。母は、父の遺産やその生命保険金（５０００万円）を持ち出し、不動産を売却し、何回かに分けて総額１億円を統一教会に寄付した。

それで不幸続きの家庭が救われることを祈ったのかもしれない。おそらく、教会側による強制的な手法で、献金させられた可能性が強い。信者の足元を見た「神の導き」だったと考えられる。その母の藁をもすがりたい思いが、事態をさらに悪くしたようだ。

多額の寄付をしたために、山上家は経済的に困窮した。子どもたちは食うものにも困るようになり、その後の山上は、それなりの学力がありながら（県内有数の高校で進学コースを進んでいた）、学費も払えなくなって、山上は大学進学をあきらめた。このころ、品がよく普段は温厚な母と、山上が激しく口論する騒ぎが、隣近所に聞こえていたという。

母は、結局２００２年に自己破産した。借金をし、その返済ができなくなったのだろう。このへんの詳しい事情はわからず、確証がないが、そんな家庭的な不幸続きが彼の精神状態を悪くした一因かもしれない、ともあれ山上にとって、母をたぶらかし、家庭の経済的困窮を招いた統一教会が**一番悪い**、と思いを強くしたわけだ。

海上自衛隊に入隊したのも、ここでは衣食住が保証されるので、そんな家庭事情があったからだろう。ここで彼は自殺未遂を起こした。伯父（山上の父の兄）の証言によると、その動機が、困窮する兄妹のために自身の生命保険金を残そうとしたものだったというから、山上には、良くも悪くも、変に思い詰めるところがある。

・精神的な不安定

２０１５年、病気がちの兄が自殺した。喪儀のとき、山上徹也は「兄ちゃん、なぜ死んだ、生きれいればいいこともあったのに……」という悲痛な叫びを発した

という。
やがて２０２２年、彼は41歳になっていた。事件現場の３キロ先にある集合住宅（狭いワンルームマンション）に一人で住んでいた。家族や親族とはずっと疎遠だったとされる。それまで定職につけなかったようだ。高校卒の学歴ながら、履歴書一枚には書ききれないほどの資格を持っていたというから、彼なりの就職活動の努力をしていたわけだろう。
今は無職ながら、人材派遣会社に登録し、２０２０年８月から今年の５月まで、京都の工場でフォークリフトを操作する仕事に就いていた。その職場で、最初は好感をもって迎えられたというが、半年過ぎて仕事が雑になってきたという。手順通りのことをしなくなった。それを同僚が注意すると、山上は「そうやったら、お前、やれや」とキレた。また、荷造りのやり方でトラックドライバーと激しくもめたことがあった。
他人との折り合いが悪くなった。彼は自己流にこだわったとされる。手順を守らないのも、彼なりに理由があったのだろう。自分のやり方を押し通し、固執した。譲らない性格で、口出しする者があれば、むきになって口論する。周囲の者とはけんか腰になり、険悪になる。もう仕事上の協調もできなくなる。
彼自身にとっても大きなストレスになる性格で、結局は、職場にいられなくなった。その職場で欠勤したりして、仕事を辞めざるを得なくなった。そんな思い込みの強さや、社会に対する恨みつらみが、事件につながった可能性がある。
その春（おそらく３月）彼は、天宙平和連合のイベント（２１年９月開催）に寄せられた安倍氏のビデオメッセージをネットで観た。〈ん？　安倍氏が統一教会を広めている。調子のいい話ばっかりだ。これを聞いて信者になろうとするものが出てくるだろうよ〉
彼の過去の記憶が呼び覚まされた。あの困窮した生活のこと、母と激論したこと、兄の壮絶な死のこと、ふてくされた妹の沈痛な顔で渦巻いたのだろう。昨日のことのように生々しく。
これがすべてのきっかけになったかのように、彼の心が揺れ動いた。「ヤツを殺してやる！」と決意した瞬間だった。
このころに彼は、人が変わったように、反抗的になった。それが職場の同僚との激しい口論や、トラックドライバーとの衝突につながったのかもしれない。その３月から彼は無断欠勤するようになった。
５月に仕事を辞めてから暗殺計画の実行に専心した。

・暗殺の準備

山上「最初爆弾を作ろうとしてが、銃にした」

手作りの爆弾では、試行した結果、殺傷力に自信が持てなかったのだろう。

「拳銃をたくさん作った」と供述している。彼は若いころ海上自衛隊に３年間いて、小銃の扱いの訓練を受けていたから、銃の構造や火薬の扱いに、それなりの知識を持っていた。マニアックな彼だから、たくさん作って試行錯誤し、〈これなら、十分殺傷力があるもの〉を作り上げたのは、今年の春ころだったという。人里離れたところで試し打ちを何度かしていた。穴がいくつも開いた木の板も、彼の車の中から出てきた。威力が確かめられた。

事件の前日に、「教団関連施設に試射した」

たしかに、真夜中の３～４時に隣近所で大きな銃声が聞こえたという証言があり、教団関連施設の隣のビルのドア付近に弾痕がいくつか残っていた。

犯行に用いたのが、容疑者が自分で作成した２連銃だ。市販の材料を寄せ集め、加工したものだ。２回発射できる。長さは４０センチほどの銃身のパイプ２本を並べ、木製の銃床部分と黒いテープで巻きつけたものだ。拳銃と言うには、大きすぎる。片手では撃てず、両手で支えて撃つものだ。銃身の短いショットガンのようにも見える。火薬は花火から得たものだろうと、専門家がメディアでコメントしていが、彼はネットで火薬の製法を学び、材料を買い集めて自分で製造していた。そして本格的な黒色火薬を作り上げだ。ここまでマネできる人は少ないだろう。

一回の射撃で、６個の弾丸を放つ仕掛けであることが分かってきた。山上は二つの筒を連装した銃で、合計１２個の弾丸を発射できるようにしていた。彼にとっては自信作だったことだろう。銃口を人に向けて撃ってみたいという「職人魂」が芽生えたかもしれない。

・実行と警備陣

前日、岡山での演説会場にも安倍氏の登壇があると知って、山上は訪れたが、ここでの入場の際、手荷物検査が行われていたので、手製銃を隠し持っていた彼はあきらめた。

当日７月８日、山上徹也は近鉄大和西大寺駅周辺での演説会場に来ていた。彼の家から約３キロの近さだったから、地の利もあったかもしれない。安倍氏の演説を知り、１時間半前に着き、場所を下見していた。

１１時３０分、山上はショルダーバッグを肩にかけ、安倍氏が立った演台の背後の歩道上にいた。狙うには

絶好の位置にいたわけだ。演説を聞くつもりなら、顔が見える前方の広場や歩道などにいるものだろう。後ろにいて演説を聞くような者は不審者として、警備陣がマークすべきだった。演台の設置場所にも問題があったことが指摘されている。

安倍晋三氏が演説を開始すると、まもなく山上がゆっくり動いた。約2分後、歩道から車道に出て、安倍氏の背後7メートルに近づいた。周囲に人がいない車道の中央で、彼はおもむろにバッグから銃を取り出し、両手で目の高さに持ち、安倍氏に銃口を向けて構えた。そして発射した。爆発音にも似た「**ズバン**」という鈍い音とともに、青みがかった白煙が多量に噴き出した。（一般の実弾では、煙はほとんど出ない）3秒後にまた「**ズバン**」

安倍晋三氏は1発目で振り返るように身をよじると、2発目を浴びた。演台から自ら降りると、まもなく倒れこんだ。上半身に2個の銃弾を浴びていた。その後の剖検で、首の鎖骨下の動脈が傷つけられ、出血したことが死因になった。心臓も傷つけられていたことが分かった。

この凶行が警備のSPや警察官たちによって防げなかったことが議論になっている。不審者が背後から近づいたのに、対応しなかった。山上が明らかに射撃する構えをし、2発を撃ち終えるまで、彼らは動かなかった。彼らが動いたのは、それからだ。4、5人の警備員が駆け付け、山上にタックルした。

警備陣のほとんどが、前のほうばかり見て、後ろから歩み寄る人物に気が付かなったとみえる。警備に油断があったことになる。背後を担当していた警備担当は一人だけで、彼は「山上より先に道路を横切った自転車など（台車を押した人物も横切った）に気を取られた」と言い訳していた。

現職あるいは、対抗勢力の党首ならともかく、首相を引退した国会議員が狙われるとは、考えていなかったのだろう。でも、安倍氏の場合、何かと恨まれたり反発を受けたりする言動をしてきたし、政敵もいただろうから、政府の幹部が、警備陣に「特別配慮」を指示すべきだった。